

屋根の上のサンシャイン

シャーンバヴィー・クリスチャン

シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムは田舎にあります。アーシュラムのほとんどは樹木に覆われています——木々が生き茂り、地表を植物が覆い、そして曲がりくねった小川はきらきら輝いています。ここはサーダナー…そして動物たち…を助ける環境をつくり出しています！このような環境では、動物たちはとても自然にグルマーイの前に現れ、グルマーイは彼らの前に現れます。幸運にも、これらの生き物の多くは友好的です。

最近グルマーイは、これらの生き物の中で私にとって特に大切な1匹について、素晴らしい物語を話してくれました。

2019年の早春、ある午前中の遅い時間に、グルマーイは散歩をしていました。ニッティヤーナンダ湖近くの小道へと曲がろうとした時、明らかに苦しそうな声が聞こえてきました。グルマーイはそれが何の音で、どの方向から聞こえてくるのかを正確に把握しようと立ち止まりました。

グルマーイがそこに立って、もはやバンシー（訳注：大声で泣いて死を予告する妖精）が嘆き悲しんでいるような甲高い、この苦悩に満ちた叫び声を突き止めようとしていた時、それがおそらく助けが必要な何らかの動物から来ているのではないかと思いました。それでグルマーイは方向を変え、そもそもの散歩の目的地へ向かう代わりに、助けを求めている声を追い始めました。

グルマーイには、その音がどんどん大きくなっていくように思えたにもかかわらず、とても長い間その音源を見つけられませんでした。その音はますます大きくなり、その背後にいる生き物の

苦しみは、明らかによりいっそう激しくなっていました。グルマーイはある所で立ち止まってぐりぐりと一回りし、目と耳で、草むら、低木、茂み、木々や植物を捜しました。そのとても不快な騒音を立てている動物を見つけ出すことにひたすら集中して約 10 分後、ついにグルマーイが見上げると、近くの平屋の屋根の上に危なっかしげに乗っている何かを見つけました。

グルマーイはより間近で見ようと急いで近づきました。彼女が見たものは…ネコでした！ 白い毛にオレンジがかかった茶色のぶちのネコです。彼女はそのネコが誰なのかを正確に知っていました。それはサンシャインでした。

「サンシャインって誰？」と、あなたは尋ねるかもしれません。ちょっとした由来を話させてください。

それは 2015 年の秋のことでした。アーシュラムの敷地内を散歩していると、野良猫がグルマーイの目に留まり始めました。彼は自分の食事を楽しむために、ニッティヤーナンダ湖の周りをぶらぶらするのが好きなようでした。彼はまた、アーシュラムの他の場所に勝手に入り込み、ここではさらに野生のおいしい食事を楽しむことができました。樹木の茂った地域で背の高い草がたくさんあることを考えてみれば、この敷地はおいしいおやつであふれていたのです。

このネコがどう猛でないと分かり、彼がアーシュラムの敷地をくつろいで歩き回っていることに気づくと(本当に、彼はどこにでもいました——サイレントパスをうろつき、 temple のそばの庭を通り抜け、すべての中庭の隅々まで視察していました)、グルマーイは彼が SYDA ファウンデーションのスタッフメンバーになりたいのではないかと思いました！

この時点で、私はもう一つ裏話をしなければなりません(いうなれば、裏話の裏話です)。それは、長い間 SYDA ファウンデーションのスタッフであるラーダとクリシュナのエバンス夫妻にまつわる話です。迷子のネコとして見つかり、最後はまさにアーシュラムの住人になっていた彼らの

ネコ、ゴールデンを、彼らは亡くしたばかりでした。グルマーイはそのことを知っていて、人を介してラーダとクリシュナに、とてもおとなしく明らかにアーシュラムにいたいと望んでいるこの新しいネコを飼う気があるかどうか聞きました。ラーダとクリシュナはとても光栄に思い、ワクワクしてそのネコを飼うことにしました。

しばらくして、彼らはグルマーイに彼を何と呼ぶべきかを尋ねました。彼の毛の色から、グルマーイは「サンシャインと名付けましょう」と言いました。そして名前の通り、特に彼がラーダとクリシュナと一緒に住んでいる家の近くの湖のそばで、サンシャインが暖かい日差しを浴びているのをよく見掛けることができました。

私はラーダとクリシュナの家の数軒先に住んでおり、幸運なことにサンシャインと仲良しになりました。私は、このハンサムな友達にあいさつするたびに、彼のその日の気分はどうだろうと思いました。彼は甘えてニャーニャー鳴くだろうか、私の脚にぶつかってくるだろうか、おなかをなでてと寝そべるだろうか？ それともショックを受けたように真っすぐ上に跳びはねて、すっ飛んでいくだろうか？ 私にはほほ笑み、喉を鳴らすだろうか、それとも私には目をくれようもしないだろうか？ しかし私は、彼が常に私をととてもとても気に掛けてくれていることを知っています。なぜなら、サンシャインからとしか思えない小さな齧歯(げつし)動物の形をしたプレゼントが、時々私の戸口で見つかるからです。

私が気づいたことの一つは、サンシャインがグルマーイに関することならどんなことでも大好きだということです。ラーダとクリシュナがサンシャインにグルマーイについて話し、サンシャインが体験したグルマーイとのたくさんの楽しいやりとりを彼に思い出させているのをよく耳にします。また、サンシャインが大好きな時間の過ごし方は、グルマーイを探してアーシュラムの敷地を走り回ること——そして彼女を遠くから見つめること——だと確信しています。グルマーイは、「おお、ずいぶん長いことサンシャインに会っていない」と思うことが時々ある、と私に話しまし

た。そして後になって、グルマーイがそう思っていたまさにその頃、サンシャインが近くにうずくまってグルマーイを見詰めているのを見た時、誰かからグルマーイは知ることです。

さて、グルマーイとサンシャインの元の話に戻しましょう——屋根の端でこれ以上ない苦悩にあるとしか思えない声でわめいていた、私たちの愛するスタッフメンバーであるサンシャインは、グルマーイにはどう見えたのでしょうか。

グルマーイは、「大変、落ちてしまう！」と思いました。建物に大急ぎで近寄り、「サンシャイン、ちょっと待っていて！」と呼び掛けました。

途端に、サンシャインは静かになりました。考えを顔の表情に出さないでグルマーイを見ました——その目はキラリと光ったのでしょうか？

しかし、グルマーイの注意はその瞬間の危難に対処することに向けられていました。彼女は同じく湖畔の建物の一つに住んでいる人間のスタッフに、来てサンシャインを下ろす手伝いをするよう求めました。

2、3分してスタッフがその場に到着すると、グルマーイはサンシャインが座り込んでいる高い所を示しました。さて、そのスタッフもサンシャインをよく知っていました。彼とそのネコはとても親密で愉快的な間柄でした。彼はサンシャインが外に出ているのを見るといつも話し掛け、からかい、食べ物あげました。

スタッフは状況を見渡しました。

「グルマーイ、サンシャインはどうやって下りるか知っているはずですよ！ 私は何回も彼がこの屋根に上るのを見ました。ほんの少しなだめるだけでいいんですよ」と言いました。そしてすぐさま、

甘ったるい、誘うような声で呼び掛けました。「ここだよ～、サンシャイン。おいで。下りておいで。おまえにはできるよ。おいで、サンシャイン」

しかし、これがサンシャインに与えた影響からすると、何も言わない方がよかったかもしれません。サンシャインは、頑として一寸たりとも動かず、座っているばかりでした。それどころか、スタッフが繰り返す優しい呼び掛けと懇願は、逆の効果をもたらし始めました。少しすると、サンシャインは口を大きく開けて、再び悲しそうな声で鳴き始めました。

さすがにスタッフは、サンシャインが本当に困ったことになっていると受け入れざるを得ませんでした。「グルマーイ、確かに助けが必要だと思います。私の部屋にはしごがあります。取って来て、私が上ってサンシャインを下ろします」と言いました。

サンシャインは、スタッフが背を向けてその場を離れるのをじっと見ていました。彼が見えなくなるや否や、サンシャインはふいに鳴くのをやめました。物憂げに4本脚で立ち上がると、脚を伸ばし背を弓なりに反らせました。

グルマーイはあっけにとられて目をしばたたかせました。そのまばたきの一瞬の間に、サンシャインはいなくなりました。あたかも、「もう行こうと！」と言わんばかりに、駆け去ったのです。

つまり、スタッフがはしごを持って戻ってきたら、もう逃げられないだろうと、サンシャインは知っていたのでした。お楽しみが——せっかく楽しんでいたグルマーイとの長いダルシャンが終わってしまうのです。

一方グルマーイは、また別の災難に陥るのではないかと心配して、サンシャインを探していました。フサフサしたオレンジ色のしっぽが動くのを屋根のてっぺんの向こう側に見た気がして、グルマーイは走って建物の反対側に回りました。

グルマーイがそこに着くと、屋根の反対側にいるサンシャインを見つけました。けれども、何か…違っているようでした。どうしてあそこであんなに穏やかに座っているのでしょうか？ ちょっと前は苦しそうにしていたネコが、今は全くもってのんきそうに見えました。涼しい顔で、冷静沈着に主導権を握っていました。サンシャインはグルマーイを、勝ち誇ったようにちらりと見ました。

グルマーイがこの状況の急展開を把握する間もないまま、サンシャインは屋根の近くに垂れ下がっている木の枝に軽々と飛び乗りました。たちまち地面に飛び下りると、素早く森の中に行ってしまいました。後ろを振り向きもしませんでした。

グルマーイは、ただ首を振り、ほほ笑んでつぶやきました。「大したものね、サンシャイン！」

その時、背丈の2倍も高いようなはしごを抱えて息をふうふう言わせながら、人間のスタッフが戻って来ました。グルマーイは彼を見ると、笑って言いました。「サンシャインが『ありがとう、でも結構』ですって。彼は全く大丈夫！ 自分で下りて、森の中に走って行っちゃった」

グルマーイがそう言ったちょうどその時、再びサンシャインが見えました。ネコは飼い主の家に向かってのんびりと道を横切り、グルマーイを 45 分も独り占めできたことに格別に満足しているように見えました。

グルマーイと人間のスタッフは、サンシャインが通り過ぎるのを、信じられない思いで見ました。大きな愛情を込めて、グルマーイがしみじみと言いました。「ネコはネコね」

